

第三十五回

佐久
(長野県)

信州の大地を潤す用水。
その管理を担った人物が、
池坊の発展に
多大な貢献を果たしました。



五郎兵衛新田 この地から数多くの池坊門弟が輩出された

佐久市内には、江戸と京都を結んでいた中山道せんとうが通り、岩村田いわむらた・塩名田しおなだ・八幡やわた・望月もちづきの四宿しよがあります。また周辺には、江戸時代前期に市川五郎兵衛真親ごろうべえ さねちかが開発した五郎兵衛新田ごろうべえ しんが広がっています。

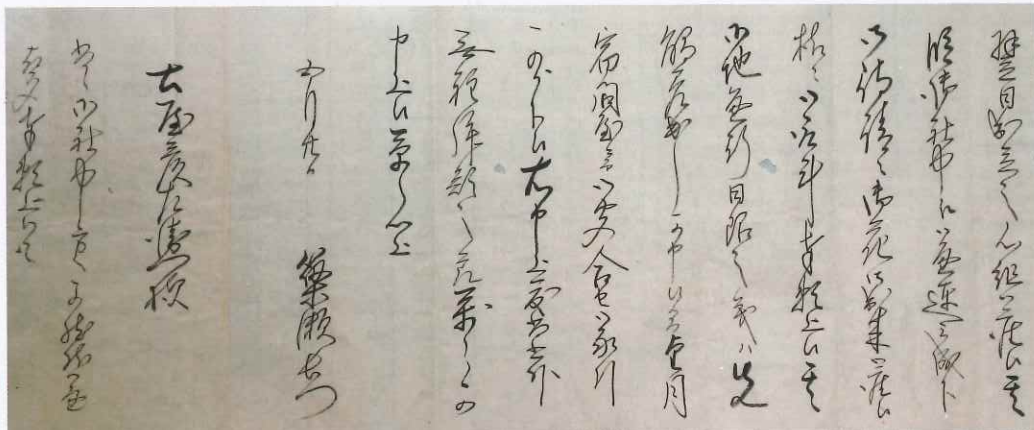
中山道を通った家元

江戸時代中期から後期にかけて、池坊の家元は、六角堂住職の継承と將軍の代替わりに際し、江戸へ行くことになっていました(本連載第十三回参照)。行きは東海道、帰りは中山道を通るのが通常の形で、これによって多くの門弟と直接会うことができたのです。

池坊に伝わる記録によれば、享保十一年(一七二六)に三十六世専純、宝暦十一年(一七六一)に三十七世専意、天保九年(一八三八)に四十一世専明が、望月宿に泊まっています。詳細がわかるのは専明の宿泊時で、六月二日、一つ手前の八幡宿で依田仙左衛門方へ立ち寄り、入門を許可した後、望月宿に入り、当地では古参の門弟である大草庄右衛門方に泊まりました。

この時、大草宅に生花が飾られたほか、近くの城光院に立花と生花が飾られ、専明も見に出掛けています。これについては、地元じよんに伝わる土屋芳彦家文書(佐久市五郎兵衛記念館寄託)に関連史料があります。江戸を立出する前の五月二十日、家元の役人・梁瀬長門やなせながと

が門弟の土屋彦左衛門に宛てた書状には、「御待請之花御出来御座候様ニ御取計奉願上候」とあり、家元を迎える花の準備を要請しています(図①)。



図① 梁瀬長門書状(部分) 天保9年(1838)5月20日(土屋芳彦家文書)

土屋彦左衛門の活躍

迎え花の準備にあたった土屋彦左衛門とは、文化三年(一八〇六)に入門した門弟で、同十二年には有隣軒の号を許されました。五郎兵衛新田の用水を管理する堰役を務めていたために幅広い人脈を有しており、彦左衛門の取り次ぎで池坊に入門する人が続出しています。専明の望月宿到着と同時に信州会頭職に任じられ、信濃国(長野県)の門弟のトップに立ちました。生花の作品図も残っています(図②)。

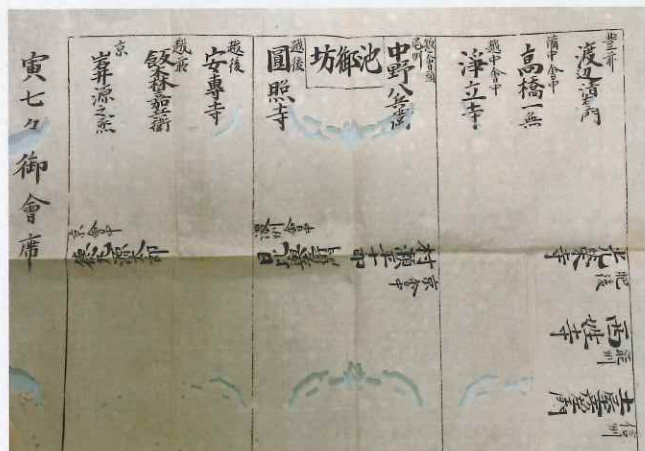
現地にある墓碑には、彦左衛門の業績が刻まれています。それによれば、天保八年(一八三七)の旱魃にあたって、「吾挿花術雖一小枝亦有祈雨法」と称して草花と松竹を挿したところ、雨が降ったといわれています。室町時代の池坊専応は、短い花枝で広範囲の優れた風景を表現できると述べましたが、その変形・進化



図② 土屋彦左衛門 生花図(土屋芳彦家文書)

版とでもいえるでしょうか。

土屋芳彦家文書の中には、六角堂・池坊における七夕会の席附(出瓶者名簿)が数点含まれており、天保六年・同七年・同九年に彦左衛門の出瓶が確認できます。また、これに先行すると思われる席附と席割図があり、そこにも彦左衛門の名が見えます(図③)。当時の七夕会は出瓶数が少ないので、これだけの回数出瓶している彦左衛門は、全国的に見てもかなりの有力門弟だということがわかります。天保十年(一八三九)の没後は、子の二代目彦左衛門が入門し、父と同じく有隣軒と称しました。弘化四年(一八四七)の七夕会の席附にその名が記されています。



図③ 七夕会席割図(土屋芳彦家文書)

京都との通信

土屋家には、京都の家元からさまざまな連絡が届いています。文化十二年（一八一五）七月には、四十世池坊専定の隠居および四十一世池坊専明の六角堂住職就任について通知がありました。書状には、「専明当七夕前住職蒙仰候」と記されており、池坊の重要な行事である七夕会を、新しい住職のもとで迎えようという意図がうかがえます。その後、天保三年（一八三二）九月には、専定死去の報も届けられました。

また、このような書状を運ぶための箱も現在まで伝わっています。写真①はその一例で、宛先は次のように書かれています。

信州望月宿

問屋御役人中様迄

同州佐久郡五郎兵衛新田

土屋彦左衛門様行

問屋というのは、宿場町の業務の責任者のことで、住民の中で有力な人物が就任しました。書状は中山道を進んで望月宿の問屋にまづ届けられ、そこから彦左衛門のもとへ渡ったようです。

専明を迎える花の準備でもそうだったよ



写真① 書状送り箱 蓋（土屋芳彦家文書）



写真② 書状送り箱 側面（土屋芳彦家文書）

うに、五郎兵衛新田の土屋家は、日頃から望月宿と緊密に交流していたのでしよう。なお、箱の側面に「賃先払」とありますが、これは現在でいう着払いのことです（写真②）。



写真③ 金龍寺 板碑

これは、専明が六角堂の本尊如意輪観音の名を書いた字を、石に刻んだものです。六角堂は、鎌倉時代に親鸞が参籠したことで知られますが、親鸞の伝記の中で六角堂の本尊は「救

西国第十八番 京都六角堂
救世如意輪観世音菩薩
六角堂別当池坊四十一世専明謹書(花押)

五郎兵衛新田の金龍寺(曹洞宗)に、興味深い板碑があります(写真③④)。上部に如意輪観音の梵字が彫られ、その下に次のような文字を読み取ることができます。

観音信仰の証



写真④ 金龍寺 板碑(部分)

世菩薩」という名で登場します。この板碑では、二種類の呼び名が組み合わされたような表現になっています。
裏面には、願主として池坊門弟八名が記されています(写真⑤)。最後の有祥軒素休は、天保七年(一八三六)に入門した高田傳兵衛のこと、その前の有隣軒は二代目でしょう。

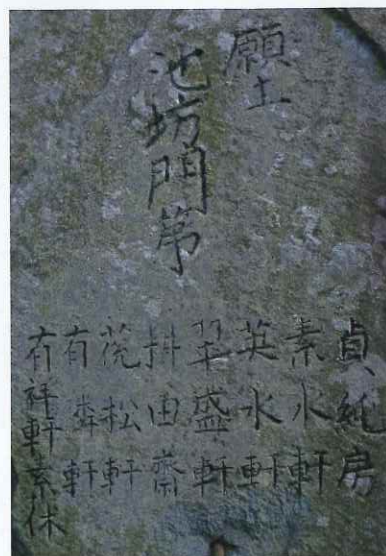


〈アクセス〉

佐久市五郎兵衛記念館

●JR北陸新幹線・小海線「佐久平」駅下車、車で約15分。

取材協力／佐久市五郎兵衛記念館 金龍寺



写真⑤ 金龍寺 板碑(裏面)

この板碑からは、地方の池坊門弟が、いけばなだけではなく、家元が住職を務める六角堂の観音への信仰も受容していたことがわかります。なお、「救世如意輪観世音菩薩」と刻んだ板碑は、近くの妙香院(天台宗)にもあります。